

# 短大における保育者養成

原口純子



## 一はじめに

真に子どもをすばらしいものだと思い、子どもと共に生活することに喜びを感じ、子どもと呼吸をぴったり合わせながら、彼らに精いっぱい充実した、楽しい生活を展開させることのできる、意欲的な保育者はどのようにして育てることができるでしょうか。

保育については全くのしろうとして入学してきた学生が、全身に保育者のふんい気をただよわせ、自分にこれからゆだねられる幼児のために、いささかの不安を感じながらも、意欲にみちあふれて卒業していくようになるために、その二年間の課程と時間の中で養成する側は、何をどのようにしたらよいのでしょうか。

ここ数年間、短大の増設に伴い、保育者を養成する短大が大きくなづえ、毎年数多くの有資格者が世に送り出されています。彼女たちが年間三十〜四十人の子どもたちに日々直接間接に多大な影響を与えていることを考えると、資格を出している養成校の責任はきわめて重大なものと思われます。

短大の場合、二年間という制限時間内で、保育者養成の課程は

また、今日の問題として、従来であれば、保育者の養成校には、保育者になりたい、と初めから志をもつて入学してくる者が多かったのに対して、最近では、特に都市部の短大においては、必ずしもそうではない学生が多く入学してくる実情にあります。

つまり資格は将来の万一に備えて一応は取りたいが、保母や幼稚園の先生になるつもりはさらさらなく、未来の母親として幼児教育についての知識と理解を身につけたいという者、あるいは全く無目的の者が多くなってきているのです。このようなまぎまな学生が、もし、資格はいらぬい、保育教養のみでよいというのであるならば、それなりの教育方法が考えられるのですが、資格を修得して出るということであるならば、入学時の意識がどうあると、保育者として、実践者としてふさわしい情熱と能力をもつて養成しなければならないのです。いいかえれば、資格を出す以上目的養成としての立場をとらなければならないのです。

どのようなものであればよいのでしょうか。私は数年間、保育科の保育原理等を担当し、学生に接し、保育者養成のむずかしさを感じました。今、反省と自戒をもつてそのあり方をあらためて探ろうとするものです。

## 二 現場に役立つ実践能力とは何か

目的養成というのは換言すれば、現場に出て役立つ能力をもつ者を養成したいということです。現場に出て役立つ保育者の養成ということを考えるとき、これは当然のことながら幼児教育をいかにとらえるかということと密接不可分の関係にあります。もし

幼児教育を、先生が必要と考える知識やしつけを与えていたり、歌やおゆうぎ、絵や製作をたくさん教えることであるという認識に立つならば、実践能力をもつ保育者の養成は、ピアノが巧みに弾け、歌や製作をたくさん覚え、また、子どもを静粛にさせる術も心得えたという人を二年間に養成すればよいのです。これは、実は幼児教育の本質を見失った時代遅れの考え方であると思われますが、現状において、ピアノや製作、リズム等の実技指導の時間が保育科の時間割の上でしめる比重の多いことを思うと、あながち前時代的ともいえないのです。

このような単純な「現場に出て役立つ保育者の養成」という考え方方が悪循環を起こし、今日の保育者の養成をゆがめ、幼児教育そのものをゆがめてきたともいえましょう。

一方、幼児教育を、何かを教えるところではなく、園での生活全般から、すべての瞬間の先生と子ども、子どもと子ども、物と子どもの触れ合いや活動をとおして、精一ぱい充実できる生活を与える中で、全体としての成長を助長するという認識に立つならば、現場で役立つ実践能力をもつ人の養成は、おのずから技術やテクニックの教育ではないものが求められましょう。全生活の中で、子どもを真に尊重し、人として育てられる保育者の養成こそ、すべての教科の担当者が真剣に取り組まなければならない課題といつてよいでしょう。

## 三 教えること——育てること

ここで考えたいのは、二年間の間に、何を教えたらいかといふ知識や技能の検討ではなく、いかにして保育者を育てたらいいかということです。つまり保育者を養成しようとして、保育についての意義や重要性、保育計画や指導方法等について教授しても、これら知識の伝達によって保育について多くの知識と理解をもつた人をつくり出すことはできますが、それは即、意欲的な保育者を育てることにはならないのです。このことは、多くの教育学者や保育学の先生が即、よい保育者ではないことからも理解されます。保育の知識や技術を教えることと、保育者を育てることとは必ずしも同じではなく、むしろ違っているというほうが妥当なように思われます。養成する側は保育者を育てたいのです。知

識も技術もそのための媒介手段で、それらの教授や伝達が目的ではないのです。しかし、媒介手段として与える知識すら、保育が行為であり、個々の教師と子どもの全生活をとおしての具体的なかかわり合いの中に初めて成立し、意味をもつことを考へると、さまざまな抽象的な言葉が頭の中を空転するような教育は意味をもたないことに気づきます。

たとえば、「子どもを尊重する」「自主性・自発性・創造性を育てる」「許容的な態度」「子どもを理解する」これらの言葉を

学生は言葉で理解し、説明することもできるのです。しかし保育の行為として具体化することができない。つまり、それらは単なる一片の知識であって、ほんとうに身についたものとはなっていないのです。これらの言葉は知らないよりは知っている方がいいにきまっていますが、言葉として知っていること自体は大事なことではなく、むしろ、「子どもを尊重する保育」などという言葉を知らないても、一人一人の子どものよさを見いだし、いやな思いや、失敗感をもたらすことなく、たのしく充実した保育ができる、むしろそれでよいともいえるのです。保育の個々の場面の中でのように対処するかが、知識としてでなく、身についた行動とならないかぎり、言葉が言葉として空転し、実質を伴わないのであって、それでは何も知らないことと同じことであるといつても過言でないと思われます。

もとより学校で教える知識の範囲などはごく限られたもので

あり、また、たとえどんなに微に入り細にわたって話したところで、学生が現場に出て当面する問題はもっと広く複雑で、学校でいくら教えたつもりでも、学生は役に立たないことばかりを学んだことになります。とするならば、短大で養い育てなければならぬのは、しっかりした幹で、それさえしっかりしておれば枝葉のことは自分で立ち向かっていかねばなりません。

#### 四 心情、理念、子どもの理解

二年間の在学期間に本当に養い育てたいしっかりした幹とは、いうなれば、保育者としての心情と、保育理念と、子どもの理解ではないでしょうか。

学生が保育者らしく育つ、または保育者として成長するということはどういうことでしょうか、それは、保育に興味を感じ、意欲をもち、保育者としての意識が育ち、心情が育つ過程とはいえないでしょうか。いいかえれば、現状では月給こそめぐまれないが、保育はほんとうにいい仕事だ、楽しくやりがいのある仕事だと一人一人が思い、そして一人でも多くの子どもに幸せな幼児期を過ごさせるために、自分はよき保育者になりたいと思う心の育つ過程なのです。各科の先生方がおのの担当科目をとおして、それらを育していくことが必要ではないでしょうか。と同時に、どういう子どもを育てたいと思うか（児童観）、どのような

保育が望ましいと思うか（保育観）ということを基本においた、借りものではない保育理念を形成することだと思います。

そして何より大切なことは、子どもをよく知ることです。しかし子どもをよく知るということは、児童心理の概説書に書いてあるような、「情緒の発達段階は」とか「子どもの社会性の発達は」などというような書物の上での、いわば抽象的な知識として知るということではなく、生きて、生活する子どものいぶきのようなものをじかに感ずることです。それは、たとえば、怪獣ごっこに興ずる子どもの姿から、あるいは「お花に水をあげて ちょうどいい」といったら、チューリップの花の中に水をみたして来た子どもの姿から、あるいはまた「先生、見てて、ボク鉄棒ぐるってまわれたの」と目を輝かせてとんで来る子どもの姿から、子どもの発達や生活を理解することなのです。

## 五 保育者の養成は保育行為である

「育てる」ということは、対象が幼児であれ学生であれ、その本質はあまり変わらないように思います。保育者の養成こそ、保育行為ではないでしょうか。

### イ 学生の気持を理解して

保育者はまず子どもの気持を理解し、受けとめ、子どもと呼吸を合わせて、彼らの興味や要求、心情をくみとり、それにふさわしい言葉をかけ、活動を提供します。

同様のことが保育者の養成についても要求されます。もし、学生の気持や関心、意識などに全くかまわずに教師が勝手なベースで講義を進めても、身についたものとはならないでしょう。まず学生の気持をよくとらえ、教師が学生の心情に呼吸を合わせなければならぬようになります。たとえば、入学当初の学生は、幼稚園の先生になりたいと思ってくる人、子どもが好きだからといふ人、なんとなくきた人、他の希望がかなえられずやむなくきた人というように入学の動機も、関心もバラバラです。しかし、どういう動機から今彼女がここにいるかということは、さして問わなくてもよいのです。大切なことは、今、ここからスタートすること、そして彼女たちがどんなに意義のあるところにはいってきたかを述べ祝福し、興味と希望を与えることなのです。

それは、子どもの世界のすばらしさを実感させることであり、保育することの喜びを知らせることでもあります。また、学生の意欲の高まつた次元では、それに答えるだけの課題なり、講義の内容をもたなければならないし、実習等で張り切ってやつたのに失敗して自信を失った学生には、その失った自信のところから、ともに歩まなければならぬのです。

### ロ 興味と意欲をもり立てる

まず、学生が、子どもはすばらしい、保育はほんとにやりがいのある仕事だと思わなければなりません。そのためにはまず教師自身が、生き生きとした保育と、子どもの実態をよく知り、心か

ら保育をすばらしい仕事だと思っていることが必要です。

保育理論の概説書の数は非常に多く、それらのどれも保育の意義や重要性、歴史、子どもの発達、指導の原理、保育内容などについて述べているのですが、そのうちのどれ一冊を読んでも、保育の具体的なイメージや子どもの姿は浮かび上がらず、そうだ、保育者になってみたいという興味も意欲もわいてこないということが、大へん残念なことですが実情であるように思います。

ではなぜそなのでしょうか。それは、要するに、「生きた子ども」から離れている議論にすぎないからではないでしょうか。保育を子どもから離れた次元で語ると味わいのないものになってしまふのです。できればどの場面にも生きた子どもがとび出してくるような、そんな実感が欲しいのです。そのためには、さきに述べたように教師自身が、保育のすばしさ、楽しさを身をもつて実感していることが必要です。そこから生まれる教師自身の新鮮な驚きや感動が学生の心に響き、学生の保育への興味や意欲をかき立てるのです。

したがって教師は、文献による研究も必要でありましょうが、

まず現場に出て、子どもと子どもの生活、生きた保育をとらえることが大切に思われます。なおその他の具体的な方法として、たとえば、スライド、ハミリ、観察記録のプリント、サイコドラマ、見学、実習などは有効な方法であり、また、絵本や童話、人形劇、ゲームなども保育への興味をかきたてるものとなりましよう。

## 八 先生と学生の結びつき

保育者は、真に子どもを愛し、可能性を信じ、理解し、許容的かつ受容的でありたいと言葉で教えるよりも、保育者を育てようとする教師こそ、まず学生を愛し、一人一人のよさを見いだし、可能性を信じ、多少じれったくとも、腹が立つても受けいれ、待つ心をもって接していくものだと思います。

もし学生自身が、先生に心にとめてもらっているという自信をもち、受けいれてもらえた心豊かな経験をもつならば、他人と接するとき、児童を保育するとき、知識としての受容ではなく人柄としての受容ができるのではないかでしょう。よい教育効果を上げようときびしくすることも大切なことです。それが著しく学生の気持を傷つけたり、とんでもない苦労をするはめにおとし入れ、学生が、保育だけはこりごりだ、孫子の代まで保育だけはやらせまいと決心させるような経験をさせては、人を育てることにはならないのです。

教師と学生の人間関係を大切にしながら学生を保育する、といふに考えると、保育者の養成は大量生産のきかない、ハンドクラフトに属する課程ではないかと思います。同一の型をドスンとプレスして保育者をつくるわけにはいかないのです。名前も覚えきれないほど数が増すことは望ましいことではありません。

## 二 生活性

人を育てるということは、どうやらあまり科学的でも理論的で

もない、不合理な部分の多いものではないかと思われます。すかつと割り切れない、どうくさくも人間くさい、少々ルーズな、そんな部分のあるもののように感じられます。それだけ複雑な過程ともいえましょう。一見無駄な、能率の悪い生活性のようなものの中に案外人間を育てる要素があつたりするのです。

それはしばしば、幼稚教育の実際の場面の中に見いだすことができます。また、それとは逆のことが、幼稚園における保育の科学的分析の研究などをみると感じられます。保育効果をあげるための保育の科学化や構造化は、子どもを本当に幸せにしていいでしようか。たとえば、ある保育を觀察し教師の有効な働きかけについて分析した結果、有効と思われる項目が、かりに十五項目あがつたとしましよう。しかし、他の教師が、その有効そうな十五項目をまつとうすれば、望ましい保育ができるといえるでしょうか。もちろんそれが可能な面もないわけではありませんが、答えは否ということになるでしょう。なぜならば、状況もちがえば、パーソナリティーもちがう人間に、同一の効果を期待することはできないからなのです。それほど保育は直線的、單純明快なものではないのです。保育は説明のつかない、証明もされたがたい、科学のあみの目にはひつからないモヤモヤした、一見無意味そうな動きや、先生と子どものつながりの中にある、とはいえないでしようか。

同様に、保育者を養成する課程は各講座の必要単位の履修だけ

にあるのではなく、二年間の全生活の中にあるのです。桜が咲けば、花見に行っておだんごを食べ、花壇に花の種をまき、花を育て、花をめでる、時には人形劇大会をやり、クラスコンバをする、先生も学生と語り共に遊びお茶ものを。見学旅行に出たり、討論合宿をする、というように日常生活やさまざまな行事をとおして、何より学生一人一人が、大きさにいえば生きる喜びを感じ、保育科はすばらしいと感ずることが大切なのです。

## 六 むすび

本稿では、保育とは何か、教えることは何か、保育者を養成するということは、どのようなことであるのか、という根本的な点に立ち返って、保育者養成という問題について考察を試みてきました。保育とは、要するに「生きている子どもを人として育てる」ということであるといつてよいでしょう。したがって、保育者を養成するためには「育てる」ということ、「生きている子ども」という二つの要因を離れて論ずることは不可能であるということになります。本稿は、この点に焦点を合わせて論じたものですが、その議論は一見、すでにわかりきったことであるという印象を与えるかもしれません。しかし保育者養成の現状をふり返ってみると、本稿の議論は決して自明ではないといってよく、保育ということの根本を問い合わせることも、あながち無益なことではないといつてよいでしょう。

(旧姓 綾部)